

捕鯨問題を題材とした平和教育 — 教養教育における実践とその効果 —

中坪 孝之

広島大学統合生命科学研究科
広島大学平和センター兼任研究員

佐々木 (木下) 晶子

広島大学客員講師

Peace Education Based on the Whaling Problem: Practice and Results in a Liberal Arts Education Program

Takayuki NAKATSUBO

Graduate School of Integrated Sciences for Life, Hiroshima University
Research Associate, The Center for Peace, Hiroshima University

Akiko SASAKI-KINOSHITA

Visiting Lecturer, Hiroshima University

Abstract

Believing biased information often causes conflicts between communities and prevents peaceful solutions of problems. Whaling (including dolphin hunting) is a topic that has caused serious differences of opinions. We conducted a peace education program with the whaling problem in a liberal arts education class for undergraduate students at Hiroshima University. In the class, the students viewed two documentary films of dolphin hunting practices in Japan, “THE COVE” and “*Kujira to Ikiru* (Life with Whale).” THE COVE stands on the side of anti-whaling and emphasizes the cruelty of dolphin hunting, whereas *Kujira to Ikiru* focuses on the fishermen’s life disturbed by anti-whaling

groups. After viewing the films, the students answered a questionnaire survey regarding their opinion on whaling. Before viewing the films, the proportion of those who answered “agree,” “against,” and “neither” to whaling activity was 20%, 13%, and 67%, respectively. The proportion changed to 9%, 61%, and 30%, respectively, immediately after viewing *THE COVE*, and to 32%, 20%, and 48%, respectively after viewing *Kujira to Ikiru*. This suggests that the contents of the films strongly affected students’ opinions. Their comments suggest that they had realized the risk of trusting biased information and importance of knowing both sides of conflicting opinions. The results indicate that this peace education program is effective in learning the base of constructive and peaceful discussion on a problem.

1. はじめに

平和教育においては、戦争やテロといった直接的暴力を題材とするにとどまらず、多文化理解や人権・ジェンダーにまつわる課題、開発および環境教育をも対象に含む「包摂的平和教育（Comprehensive Peace Education）」の概念が提唱されている（Reardon 1988）。広義の平和教育はESD：Education for Sustainable Development（持続可能な開発のための教育）の理念やSDGs：Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）のターゲットとも重なる多様な課題を包摂し、平和教育のための題材や関連分野の裾野は広がるが、狭義であれ広義であれ、平和教育に共通する固有の課題は「コンフリクト（対立）の非暴力的解決」にあるとみることができる（竹内 2011）。

問題の平和的解決（対立の非暴力的解決）のために対話が必要なことは、誰もが認めるところであるが、実際には意見を異にする集団、個人間の対話は容易ではない。近年のインターネットの普及やSNSの発達により、多くの人々がさまざまな情報を容易に入手できるようになったが、偏った主張のみを選択するようになれば、かえって対立を悪化させることになる。この点で「片方の情報のみをうのみにすることの危険性」「異なる主張の双方を知ることの重要性」を理解させることは、平和教育としても重要な課題の一つといえる。

明確な意見の対立があるテーマの一つに捕鯨問題がある。古くから鯨類を食用としてきた日本は、しばしば反捕鯨国の批判の対象になってきた。一部の反捕鯨団体による妨害活動は、マスコミにも大きく取り上げられ、社会問題にもなっている^{1), 2), 3)}。反捕鯨団体による妨害活動が活発化するきっかけとなった事例として、和歌山県太地町で行われているイルカ追い込み漁を題材にしたドキュメンタリー映

¹⁾ 水産庁 水産白書（7）捕鯨をめぐる国際情勢（最終閲覧：2022年1月26日）

https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h29_h/trend/1/t1_2_3_7.html

²⁾ 日経新聞電子版（2013年2月16日、最終閲覧：2022年1月26日）

<https://www.nikkei.com/article/DGXNZO51793490W3A210C1CC0000/>

³⁾ 紀伊日報電子版（2021年8月20日、最終閲覧：2022年1月26日）

<https://www.agara.co.jp/article/143581>

画「THE COVE」の公開がある。第82回アカデミー賞長編ドキュメンタリー映画賞を受賞したこともあり、大きな話題となった。その一方で、作品内に不正確な数値情報や演出映像、対象者に目的を偽ったインタビュー映像が含まれていることなどが問題視され、日本国内では映画館で上映に対する抗議運動にも発展し社会問題となった⁴⁾。その後、本映画を受け日本人監督により2本の映画⁵⁾・⁶⁾が製作、上映されたが、テレビ番組としてはNHKスペシャル「クジラと生きる」が放映された⁷⁾。この番組は、「THE COVE」で批判の対象にされた鯨漁師の側にスポットを当てた内容で、「THE COVE」とは対照的な視点から制作されている。捕鯨問題は、深刻な意見の対立が膠着した状態が続いていると同時に、日本が国際的に明確に批判の矢面にさらされている事象でもある。そして異なる立場、相反する主張に基づくコンテンツが複数発信されていることから、意見の対立やそれぞれの立場からの情報発信について考えるための題材としても有効だと考えられる。著者らは、広島大学の全学選択必修科目として開講されている「平和科目」の一つ「環境と平和」の中で、前述した「THE COVE」と「クジラと生きる」を教材として、対立する視点・主張をどのようにとらえるべきかについて受講生に考えさせる授業を実施した。本稿は、その授業の中で行った受講生対象のアンケートをもとに、授業効果を検証するとともに、平和教育としての意義について考察したものである。

2. 捕鯨をめぐる動向

日本を中心とした捕鯨をめぐる問題については、さまざまな立場から多くの解説、考察がなされているが、ここでは本稿をすすめるにあたり必要な情報を簡単に整理しておきたい。

一口に捕鯨といっても、大型鯨類と小型鯨類とで状況が大きく異なっている。日本の大型捕鯨は、長期にわたりIWC（国際捕鯨委員会）の下で実施されてきた。日本は鯨類資源の持続的な利用のため、1951年に国際捕鯨取締条約を締結しIWCに加盟した。しかしその後、保護を優先する反捕鯨国の加盟が増加し、昭和57（1982）年には商業捕鯨モラトリアム（一時停止）が採択された。その後日本は調査捕鯨を実施してきたが、それに対する反捕鯨団体の抗議活動は活発化し、国際問題となった（森下 2018）。商業捕鯨モラトリアムは1990年までに見直しが行われることになっていたが、その後も見直しは行われず、日本は2018年12月26日にIWC脱退を通告、2019年7月から大型鯨類を対象とした捕鯨業を再開するに至った⁸⁾。一方、小型鯨類を対象とした捕鯨はIWCの管轄外にあったため、商業捕鯨モラトリアムの間も実施されてきた。日本の小型鯨類漁業は、農林水産大臣の許可漁業である「小型捕

⁴⁾ 朝日新聞電子版（2010年6月5日、最終閲覧：2022年1月26日）

<http://www.asahi.com/showbiz/movie/TKY201006050158.html>

⁵⁾ 「ビハインド・ザ・コーヴ Behind “THE COVE”～捕鯨問題の謎に迫る～」

<https://behindthecove.com/>（最終閲覧：2022年1月26日）

⁶⁾ 「おクジラさま ふたつの正義の物語」

<http://okujirasama.com/>（最終閲覧：2022年1月26日）

⁷⁾ 「NHKスペシャル クジラと生きる」

<https://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.html?aid=20110522>（最終閲覧：2022年1月26日）

⁸⁾ 水産庁（2021）捕鯨をめぐる情勢

<https://www.jfa.maff.go.jp/j/whale/attach/pdf/index-60.pdf>（最終閲覧：2022年1月26日）

鯨業」と知事許可漁業である「いるか漁業」に分かれ、後者はさらに漁法によって二分される⁹⁾。現在日本国内でこれら小型鯨類漁業が行われている場所の一つが和歌山県太地町である。

3. 相反する視点：ドキュメンタリー「THE COVE」と「クジラと生きる」

「THE COVE」は和歌山県太地町で行われている、いるか追い込み漁を批判的に取材したドキュメンタリー映画である（レイ・シヨホス監督、2009年公開）。元イルカ調教師であり、現在は保護活動家として知られるリック・オバリー氏が保護活動を展開する動機を回顧するとともに、彼が取材チームを編成し、同地にいるかを追い込み捕獲する場となっている入江（Cove）に潜入し、漁を隠し撮りするまでの過程や漁師がいるかを捕らえる様子を撮影している。また様々な立場にある日本人へのインタビュー映像や日本の捕鯨にまつわる外交政策に関する言及なども含まれる。先に述べた通り、本作品は第82回アカデミー賞長編ドキュメンタリー映画賞を受賞、公開後から国内外で非常に話題となった一方で、その取材方法や、不正確な数値情報および演出映像、また取材対象となった人物への虚偽説明やプライバシーへの配慮が欠ける点等、多くの批判、論争が生じた（佐久間 2018）。「THE COVE」公開後には、海外の反捕鯨団体、活動家が太地町へ多数訪れ、イルカ漁の妨害や漁業関係者への挑発行為を繰り返す事態に発展した。

NHKスペシャル「クジラと生きる」¹⁰⁾ではそのような状況に陥った太地町で、2010年から半年かけ、いるか追い込み漁に従事している漁師の視点に立ち取材をおこなっている。太地町で永らく続けられてきた捕鯨の歴史や、それらにもとづく地域の文化やコミュニティの在り様も紹介すると同時に「THE COVE」上映後、反捕鯨団体や活動家らによって、日常生活や生業が著しく乱され、また批判の対象とされてしまうことへの苦悩にスポットを当てている。なお、この番組ではいるか追い込み漁の対象である小型鯨類に対して、一貫して「クジラ」との表現が用いられるとともに、追い込み漁イルカの水族館導入問題（桐畑 2016）については触れられていない。

4. 広島大学教養教育平和科目「環境と平和」における実践

広島大学では平成23年度より、全学選択必修科目として「平和科目」を開講し、「戦争・紛争、核廃絶、貧困、飢餓、人口増加、環境、教育、文化等の様々な観点から平和について自ら考え、理解を深める」ことを目標としている¹¹⁾。令和元（2019）年度には、3つのキャンパスで合計28の平和科目が開講さ

⁹⁾ 水産庁 水産研究・教育機構（2019）小型鯨類の漁業と資源調査（総説）
http://kokushi.fra.go.jp/H30/H30_47.pdf（最終閲覧：2022年1月26日）

¹⁰⁾ 「NHKスペシャル クジラと生きる」（初回放送2011年5月22日）
<https://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.html?aid=20110522>（最終閲覧：2022年1月26日）

¹¹⁾ 広島大学ウェブサイト（最終閲覧：2022年1月26日）
<https://www.hiroshima-u.ac.jp/nyugaku/manabu/kyouyu>

れた。

「環境と平和」は平成23年度当初より開講されている授業科目で、地球環境の保全と資源利用のあり方に着目し、「食料問題」「水資源問題」「地球温暖化」「生物多様性の減少」などについて取り上げ、おもに自然科学的観点から、その現状と原因を概説するとともに、解決のための方策について考えることを目標としている¹²⁾。令和元（2019）年度に実施した90分15回の授業のうち、第12回 水産資源をめぐる問題、第13回 環境情報をどうとらえるか1、第14回 環境情報をどうとらえるか2、において捕鯨に関する内容を扱った。この授業の目的は、捕鯨（小型捕鯨およびいるか漁業を含む）の是非そのものを問うことではなく、「相反する主張の一方のみをうのみにすることの危険性」を認識することにある。このため、授業を通じて捕鯨の是非については極力触れないようにした。

第12回「水産資源をめぐる問題は」は、水産資源をめぐる問題とその持続的利用のための方策について解説する内容であるが、その終わりの部分に「捕鯨をめぐる問題」として、次回につながる予備知識として捕鯨全般に関する事項について話をした。主な内容は、クジラにはヒゲクジラとハクジラがありイルカもクジラの仲間であること、IWCと商業捕鯨モラトリアムの概要、商業捕鯨、調査捕鯨、先住民生存捕鯨、沿岸小型捕鯨の違いなどであるが、予告として「THE COVE」とその上映が社会問題になったことを簡単に紹介した。

捕鯨に関する授業は、翌週の第13回と第14回において「環境情報をどうとらえるか1、2」として実施した。第13回では「THE COVE」のDVD（約90分）をすべて視聴し、つづく第14回で「クジラと生きる」（約50分）をすべて視聴した¹³⁾。第14回の「クジラと生きる」視聴後、残り40分程を用いて、自由記述形式のレポートを課した。レポートでは1）DVDを片方だけ視聴した場合と、両方視聴した場合とで、自分の考えがどのように変化したか（あるいはしなかったか）と、その変化の有無も踏まえながら視点をより一般化し、2）「環境情報全般を取り扱う際に気を付けるべきこと」について考え記述することを課した。また授業効果を検討するために、DVD視聴による捕鯨の是非についての意見変化を問うアンケートを同時に実施した。アンケートは無記名、任意提出の形式で行い、提出の有無、回答内容は成績評価に一切影響しないことをアンケート用紙中に明記し、口頭でも周知した（付表1）。アンケートおよびレポートはすべて実施当日の授業終了時に回収した。

5. アンケート結果とレポート自由記述にみる授業効果

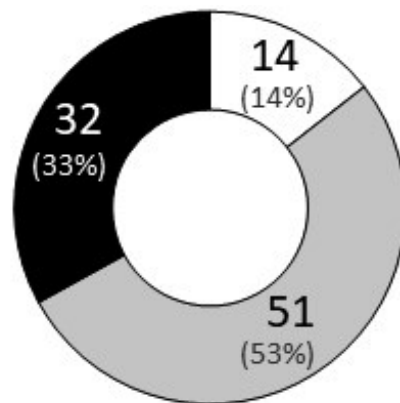
アンケートの回答結果を項目ごとに集計し、DVD視聴による受講生の意見変化の傾向をまとめた。捕鯨に対する学生の意見には、鯨肉を食べた経験の有無が影響を与える可能性があると考え、DVD視聴による意見変化の有無のほかに、鯨肉を食べた経験の有無についても尋ねた。任意提出のアンケートの結果、提出者の7割近くが鯨肉を食べた経験があると回答した（図1）。鯨肉を食べた経験について

¹²⁾ 広島大学シラバス「環境と平和」（最終閲覧：2022年1月26日）

https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/syllabusHtml/2021_AA_11014001.html

¹³⁾ 広島大学では平成27（2015）年度からクォーター制を導入し、一年を4学期に分けて授業を実施している。本授業は、90分授業を2コマ連続して実施しているため、受講生は2つのドキュメンタリーを連続して視聴した。

は、アンケートの自由記述欄において「学校の給食で」という記述が複数あった他、「地元の名産品だった」「味噌汁の具材として食べた」「美味しかった」といった具体的な経験や思いが記されていた。



□ 何度もある □ ある ■ ない

図 1. アンケート「これまでにクジラを食べたことがありますか？」に対する回答
 グラフに添えられた数字は人数、カッコ内の数値は全回答数に対する割合 (%) を示す。
 (有効回答者数：97名)

捕鯨の是非に関しては、「事前講義後・DVD視聴前」には6割以上の受講生が「どちらともいえない」と考えており、賛成あるいは反対と明確に意見を持っていた者はそれぞれ1～2割程度であった。しかし「THE COVE」視聴後には6割の受講生が捕鯨に対して反対と考えるようになった。つづけて「クジラと生きる」を視聴後には「賛成」と考えるものが3割にまで増加し、またあらためて「どちらともいえない」と考えるようになった者が半数近くにのぼった。これらの結果から、受講生の多くが「THE COVE」、「クジラと生きる」それぞれのドキュメンタリーが示す視点に応じて捕鯨の是非に対する意見が変化したこと、そしてそれを受講生自身が認識したことが確認できた(図2)。



図 2. 「捕鯨」に対する受講生の意見の変化

捕鯨を題材とし、対立する視点から制作された2本のDVDを視聴後、受講生の意見変化について任意で回答を得た。グラフに添えられた数字は人数と全回答数に対する割合 (%) を示す。

(有効回答者数：96名)

実際にレポート課題1)「捕鯨の是非に対する自身の考えの変化についての自由記述」でも、どちらのドキュメンタリーを視聴しても考えは変化しなかったとする記述がある一方、視聴を通して自身の考えが大きく変化したとして、具体的にその理由も述べたものも多くみられた(表1)。また受講生がどのような気づきを得たのか具体的に把握するため、レポート課題2)「環境情報全般を取り扱う際に気を付けるべきこと」に関する記述内容について、言及されているキーワードに基づいて類型化し、記述者数をカウントした。その結果、頻出した言葉は「客観的」「多面的・多角的」「複数」「異なる・多様」「視点」「立場」「根拠・正確性」「疑う」であった。中でも多かったのは「客観的、多面的・多角的、複数、多様な」「視点、立場」についての言及であった。これらはその内容から更に「(情報に接した際に)客観的・多角的な視点を持つこと」と「(多様な、異なる意見があるという前提で)複数の情報を得る」ことを重視する意見に大別でき、全体としては「客観的・多角的な視点」「複数の情報を得る重要性」「情報に対する批判的思考」「発信者側の意図」の4つに類型化することができた(表2)。

表1. レポート課題1)「2つのDVDについて、片方だけ視聴した場合と、両方視聴した場合とで、自分の考えがどのように変化したか(あるいはしなかったか)を述べよ」に対する記述例*、**
(一部抜粋;カッコ内は著者注釈)

[意見変化あり]

- The Coveには一方的に「悪」とみなされていた捕鯨が漁師目線から見ると人の営みにおいて必要なことではないのかと感じた。
- 今まで捕鯨に関してあまり考えたことがなかった。しかし「The Cove」を見たときに捕鯨は悪いことだ、クジラやイルカがかわいそうだと思ってしまった。(中略)しかし、「The Cove」に反論してできた「クジラと生きる」の映像をみて漁師さんたちの意見を聞き、私の思いはすぐに変わった。
- 「ザ・コーブ」を見たとき凄く衝撃を受けた。(中略)しかし(「クジラと生きる」の)視聴を続けるうちに、その地域の人々の生活の糧になっていること、人と人とをクジラが繋いでいることを知り、一概に捕鯨に反対の立場であると言えなくなった。今はどちらにも賛成できない。
- 視点となっている側の考えに共感してしまう。「ザ・コーブ」を見ているときは、イルカ漁だけでなく水族館にイルカがいる事すら反対だと思ったが、「クジラと生きる」の「人間は他の生き物の命をいただいて生きているのだから、賢いから殺さないという意見はわからない」という言葉も納得できた。
- 賛成側と反対側のどちらの意見が正しいものなのか分からなくなった。
- 「ザ・コーブ」の映像を見た際、捕鯨に対して反対であると思ったが、2つ目の「クジラと生きる」という映像を見た時に賛成なのか反対なのか分からなくなってしまった。2つのことを比べる際には双方の意見を対等に聞き入れ理解することのできる第三者的な立場の視点がとても重要になってくるなど感じた。
- たった二時間弱でこれほどまでに考え方が変化してしまい、自分でも驚いた。視点や組織の考え方によって物の見え方が全く異なるということに気づかされた。

[意見変化なし]

(賛成のまま)

- 捕鯨についての考え方はほとんど変化しなかった。「ザ・コーブ」で見られた一方的な視点ではなく太地の側からの視点、思い、考え方をわずかではあるが知っていたから。(中略;出身地が近く)「ザ・コーブ」に出てきた場所を訪れたり、イルカの刺身を食べたこともある。実際自分の目で見て、太地の町とクジラやイルカとの深いかかわりを感じたから。
- 先に見た「The Cove」では捕鯨は完全に悪として扱われていた。しかし、その捕鯨やイルカの解放のやり方がかなり過激であり、あまり共感することはできず「クジラと生きる」を見てもやはり捕鯨やイルカの捕獲は完全な悪ではないという点で自分の考えは変化しなかった。
- 給食でクジラ肉を食べていたため、鯨食が普通であったから、どちらのDVDも見方が一面的すぎるから。

(表 1. 続き)

(反対のまま)

- ・イルカ漁や捕鯨に関して無知だったこともあるが、最初に鑑賞した映画の内容があまりに強烈すぎて、考えは一貫して変わらなかった。
- ・港が血で真っ赤になるシーンは見ていて辛かった。日本がこそこそ悪いことをしているなど思った。「クジラと生きる」を見始めたときはとても抵抗があって脳内でいちいち批判していた
- ・そもそもクジラを食べるということに対して疑問があった。

* レポート用紙には論文等における記述内容の引用可否を問う欄を設け、各受講生の意思確認を行った。

** 記述引用への同意が確認できた例のみを掲載し、特定の個人や団体名へ言及した記述例は掲載対象から除外した。

表 2. レポート課題 2)「環境情報全般を取り扱う際に気をつけるべきこと」に対する自由記述内容*
(回答者数：124名、複数回答可)

授業を通じた受講生の「気づき」	回答数 (人)
客観的・多角的な視点を持つことが重要	46
複数の視点から情報を得ることが重要	46
発信者の意図、発信者による情報の切り取り方に注意しなければならない	28
情報を批判的に見る姿勢が必要(疑ってみる、根拠を確認する)	20
その他**	16

* 一名が複数の「気をつけるべきこと」に言及している場合は、それらすべてを複数回答としてカウントした。レポート提出者の記述意図が不明確な場合はそのままとし、その意図を類推することは避けた。

**「その他」には「少数派の意見も尊重されるべき」「多様な文化・価値観に注目すべき」「公平さや秩序が守られるべき」といった意見が含まれた。

具体的な記述内容としては、1つの情報のみに頼ると自分の意見が偏るリスクがあること、客観的な視点に立ち、複数の情報にアクセスすることや、対立する意見・情報に目を向けてみることの重要性に言及した回答が多かった。さらに情報の根拠やその正確性を確認する必要があるとする意見、実際に視聴したDVDが同じ題材を扱っているにもかかわらず、製作者の意図や編集の結果それぞれで示された情報が大きく異なることに触れ、発信側による情報の編集・取捨選択に気を付けるべきだとする意見も複数あった。これらは著者らが当初意図していなかった受講生による気づきであった(表 3)。

表 3. レポート課題 2)「環境情報全般を取り扱う際に気をつけるべきこと」について自身の考えを述べよ」に対する記述例(一部抜粋;カッコ内は著者注釈)*, **

[意見変化あり]

- ・可能な限り多くの視点から見る必要があると感じた
- ・一つの視点から物事を見るのではなく、反対の立場など多様な視点から考えること
- ・自分の意見が簡単に変変わったことから、情報を得る時はいろいろな面から正しい情報を得ることが大切だと思った。
- ・あまり知識のない状態で片方の立場のみに目を向けるのは非常に危険(中略)対立における両立場の意見を正確に理解したうえで自分の意見を考えるということがいかに重要であるかを知ることができた
- ・制作者の伝え方によってこんなにも人の意見は左右されるのだということに気づいた。

[意見変化なし]

(賛成のまま)

- ・複数の視点から問題をとらえること(中略)そうすればそれぞれの情報を鵜呑みにすることなく独自の意見を持つことができるようになる。

(表3. 続き)

- ・ 一方的に決めつけで物を見るのではなく、**多面的に複数の情報から考察していく**ということに留意しておかなければならない。
- ・ どちらの意見も**中立的な立場**で咀嚼する必要がある
- ・ **情報の出所を精査**して主体的に情報を理解する姿勢
(反対のまま)
- ・ 本当に正しい事実を知るためには、**様々な立場で見ない**といけない。ただうのみにせず、**情報の確実性**を把握し、脳内で考えながら、**批判的思考**をもって何事も知っていく必要がある。
- ・ **たくさんの視点からみる**ということ (中略)。もっとほかの立場の意見があるのではないかと調べなければならない
- ・ **対立するお互いの意見**を詳しく聞くことが大切
- ・ その**情報の発信者の意見**が大いにふくまれているということを意識すること
- ・ 自分の触れた情報は正しいのか**まず疑う**ことが必要

* ゴシック文字は、記述内容を類型化する際にキーワードとして扱った言葉。

** レポート用紙には、論文等における記述内容の引用可否を問う欄を設け、各受講生の意味確認を行った。記述引用への同意が確認できた例のみを掲載し、特定の個人や団体名へ言及した記述例は掲載対象から除外した。

アンケートは無記名であったが、レポート課題は記名式であったため、表現が抑制的になったり、こちらの意図を類推した記述を誘導してしまう可能性も考えられた。しかし実際には、捕鯨に対する意見、その変化、環境情報を取り扱う際に気を付けるべきだと考えたこと、いずれについても様々な回答とその理由についての多岐にわたる記述が認められた。また、回答者の捕鯨に対する賛否、意見変化の有無による記述内容の特定の偏りや傾向は認められず、大多数の受講生が環境情報を取り扱う際に気を付けるべきこととして「客観的・多角的な視点を持つこと」「異なる視点から複数の情報を確認すること」「発信者の意図を意識すること」「情報の根拠、信頼性を確認すること」の重要性について各々が認識、言及していた(表3)。これらのことから、「同一のテーマでありながら視点・主張の対立した複数の情報」に同時に接する経験が、「片方の情報のみを鵜呑みにすることの危険性」「異なる主張の双方を知ることの重要性」を理解するうえで非常に有効であるといえる。

6. むすび

ある事象について一部の偏った情報のみを鵜呑みにすることは、「対立の非暴力的解決」を著しく阻害する。今回は明確な意見の対立が存在する題材として「捕鯨」を取り上げたが、捕鯨に限らず、対立する意見・主張に同時に接する機会を提供することは「片方の情報のみを鵜呑みにすることの危険性」「異なる主張の双方を知ることの重要性」に対する理解を促すと期待される。今回は時間的制約から実施には至らなかったが、グループディスカッション等アクティブラーニングの手法をより積極的に取り入れ、受講生間で「気づき」を共有しながら議論を深める場を設けることによって、更に教育効果を高めることも可能であろう。冒頭でも述べた通り、社会における情報化が加速し、私たちが日常的に接する情報量は著しく増え、また誰もが容易に情報発信もできるようになった。しかしその結果、近年では、SNSを含む様々な情報メディアを介したデマやフェイクニュース、人権侵害が社会問題となっている。

偏った主張とそれらを一方的に発信する情報が対立を増長することが危惧されており、問題解決に向けた啓発が喫緊の課題となっている。このような傾向が国際的にも強まる中、平和教育の一環として、今回実践したような教育プログラムに対するニーズは、今後さらに高まってくるであろう。

参考文献

- 桐畑 哲雄 (2016) 追込み漁イルカの水族館導入問題について、『日本水産学会誌』、82(4)、pp648-650
- 森下 丈二 (2018) 捕鯨をめぐる対立の構造、『鯨研通信』477、pp11-17
- Reardon, Betty A (1988) *Comprehensive Peace Education: Educating for Global Responsibility*. New York, Teachers College Press.
- 佐久間 淳子 (2018) ドキュメンタリー映画「The Cove」がもたらしたもの、2本の反論映画でも見えてこない捕鯨問題の本質を探る、『応用社会学研究』60、pp251-271
- 竹内 久頭 (2011) 平和教育学への予備的考察(3)ー平和教育学の課題と方法、『東京女子大学紀要論集』61(2)、pp223-236

